

安永期の弘前藩刑法

—寛政律との比較—

蝦名庸一

一はしがき

弘前藩においては、安永四年（一七七五年）に一定の裁判の基準として、刑罰に関する定めを設けている。たゞ此の規定も、今日の近代社会において刑法が人權を保障する意味での罪刑法定主義

の原則から規定されるのとは異なること勿論であり、裁判が先例を考えたりする爲に選れたり、又区々になつて公正を害することを考慮して全く一定の規準として、更に裁判の實務を担当した四奉行の参考に規定されたと考えられるのである。それは安永の御刑罰御定の一番終りに記されている御家者より御用人あての覺の中に「別帳之趣而已」＝ては一定之規程＝難被仰付候。沙汰之砌右之趣

を致動弁批判、遂穿鑿勸善懲惡＝相成候様・時宜、心得可存之旨、被仰出候。云々」とあることから推察されるわけである。かようなわけで、十分整備されていないのであつて、項目にして15、条数にして98を数えるばかりである。

かくて安永より十数年後の寛政年間に至り、刑法典の編纂事業に本格的に着手することになつたのである。そして寛政九年（一七九七年）に制定されるに至つた。此が寛政律と稱されるものである。それをさきに本誌15・16合併号に「弘前藩御刑法牒（寛政律）」として発表させて頂いたのであつた。

安永の刑法は先に述べたように、非常に大まかなものであるだけに、そこに盛られている項目は

当時、特に犯罪として重視したものと考えられるのである。そこで次に享永期の刑罰規定の全文を紹介し、更に寛政律との若干の比較を試みて、その特色を考えてみたいと思う。

二、享永期の刑法全文

享永期の弘前藩刑法を知り得る史料は、弘前図書館所蔵の「御刑罰御定 享永四乙年未八月」(表紙)である。此は本誌15・16合併号の拙稿43頁で触れて置いたように、件裁・紙積・字の大きさ等から推して藩日記と同程度であり、原本と考えられるので、それを全文紹介することにする。便宜上、項目と条文に番号をつけ、本文に送り表を附した。各行は原文の通りにしたので字数はまち／＼であることをお断りしたい。

構成) 全九八ヶ条

一 主殺之者御仕置

10ヶ条

二 親殺之者御仕置

8

三 人殺御仕置

23

四 火附御仕置

2

五 牛馬盗人之御仕置

6

六 盗賊之者御仕置

16

七 博奕致し候者御仕置

4

八 謀書謀判致し候御仕置

7

九 相対死之者御仕置

3

一〇 喧嘩致し論候者御仕置

6

一一 立婦若并御用所脇道忍出入之者御仕置

5

一二 盗拙之者御仕置

3

一三 盗津出之御仕置

2

一四 盗田畑之者御仕置

1

一五 公事訴訟頭訴御仕置

2

享永四乙年

御刑罰

御定

(表紙)

未 八月

(本文)

一 主殺之者御仕置

一 主人を殺候者男女不限難者鑑引

肆所等之儀其節沙汰被仰付候尤往来之者
勝手次第才鑑引致し候様立札致し候而日限
相済候迄鑑引仕候者無之候ハ、其節引廻し
之上磔

—2
乱心ニ而主人を殺候者乱心無紛といへとも
逆罪故引廻し之上磔

但酒狂ニ而後同科同罪

—3
下人主人より暇出候而外に發奉公罷有、
本主人を殺害致し候者、元主人当主人之
差別無之奉式之御仕置

但何方に發奉公不致帶に出入主人

同前之致奉公罷候者同科同罪

—4
下人に頼れ人之主人を殺候者獄門

—5
主人江今疵を得せ候者ハ屬手買候迄ニ而
不切殺候得共逆罪之御仕置相成候間、肆
之節鑑引立札ニ不致、様御仕置相成候

但乱心酒狂同科同罪

—6
怪我にて主人を殺候者怪我之証無紛

においてハ新罪

但主人之親又は兄杯有之則命相願候得は

品ニより重鞭刑追放被仰付候事

—7
怪我にて主人爲寺買候者準前条

—8
主殺之者之子共男子拾五歳以上者

重鞭刑追放、拾五歳以下ハ鞭刑追放被仰濟

身寄之者江御預被仰付拾五歳ニ相成重

鞭刑追放之事

—9
主殺之者自滅ニ於てハ死骸塩漬磔

可致事

—10
主殺之者ニ同類にハ無之共其者に被頼
住所を隠し或ハ立退せ候者ハ新罪

ニ親殺之者御仕置

—11
親を殺候者男女不限肆者鑑引

肆所等之儀其節沙汰被仰付候尤往来
之者勝手次第才鑑引致し候様立札致し
候而、日限相済候は、鑑引仕候者無之候ハ、其節
引廻し之上磔

引廻し之上磔

—12
乱心にて親を殺候者乱心無紛といふ共

逆罪故引廻し之上磔

但酒狂ニ而後同科同罪

—13 親江手疵を得せ候者ハ爲手買候迄ニ而

不切殺候共逆罪御仕置相成候。晒之節
鋸引不_レ及立札ノ碌。

但乱心酒狂同材同罪

—14 怪我ニ而親を殺候者ハ怪我之証拠無紛ニ

於てハ斬罪

—15 怪我ニ而親江手疵を得せ候者怪我之

証拠ニ依て親之願仕丁ヘキ事

—16 親殺之者之子共男子拾五歳ケ以上ニ重

鞭刑追放、拾五歳以下ハ鞭刑追放被_レ仰渡

身寄之者江御預被_レ仰付拾五歳ニ相成重

鞭刑追放之事

—17 親殺之者自滅に於てハ死骸塩漬碌

可致事

—18 親殺之者同類には無之共其者ニ被_レ頼

住所を隠し或ハ立退せ候者斬罪

三人殺御仕置

—19 人を殺候者男女不限斬罪

但盗に入殺候と申にて無之、遺恨有之

殺候と申儀ニ而下手人

—20 人に被_レ頼人を殺候者斬罪

—21 乱心酒狂にて人を殺候者斬罪

但前条同様下手人。尤右三ヶ条之死骸

不取拾親類身寄之者又ハ親類身寄

之者或無之候ハ、町内村所杯死骸引取

願出候ハ、被_レ下置候事、若左様之者無之候ハ

是迄之通乞食手ニ而片付候様。

—22 高祖父・曾祖父・祖父・伯叔父・姑を殺候者

肆者碌

肆所等之儀其節沙汰被_レ仰付候。右日限

相濟於御仕置場碌

—23 舅姑を殺候者引廻之上碌

—24 夫を殺候女引廻之上碌

—25 兄を殺候者引廻之上碌

—26 身を病_レ我儘に殺候者斬罪

—27 女房を無_レ故我儘に殺候者斬罪

—28 怪我ニ而人を殺候者ハ怪我之証拠健に

於有之者、被_レ殺候者之親類又ハ寺院等方

赦免之願於有之は用捨、時宜御沙汰之事

—29—
子を殺候者雖不_レ及_レ解死人時宜之御沙汰之事

—30—
拾四歳以下之子共喧嘩_二而相争之子共打殺候節、拾五歳以上解死人

但右拾四歳以下者出家又は相果候子之親之願等或於有之は時宜御沙汰之事、尤人之強弱人品等御沙汰之事

—31—
主親親殺其外重科之者逃走候者、其預り居候者并而親有之者兩親入牢。

但科人御詮儀及教月候而後不出候ハ、出牢被仰付候事。

—32—
在方町方庄屋名主支配方不相違私_二差四いたし人殺候者ハ磔

但差四を受人殺候者ハ、重鞭刑追放、又ハ時宜御沙汰之事。

—33—
支配所之内人を殺候者を存_二隠置、支配所江不_レ申出候者ハ重鞭刑之上追放、時宜御沙汰之事

—34—
人を殺候者を始末_二存其者_二被_レ頼隠置候者ハ家賊兩所追放

—35—
人を殺候者に被_レ頼立退せ候者ハ死罪但事之始末輕重依て時宜御沙汰之事

—36—
其身不_レ得等_二而親之勘当を得、立帰親之家内之者杯江意趣を合_二殺害之者ハ

—37—
獄門 偶を致し錢を添_二黄候養子を殺候者獄門

—38—
町方在方にて下人を無_レ義殺害之者、雖不_レ及_レ解死人時宜御沙汰之事

—39—
但追放鞭刑輕重可_レ隨時宣事

—40—
取捨 人を殺候者自滅に於てハ死罪不_レ及_レ隠置

—41—
牛馬を牽往來致し候者不_レ隱にて人を蹴殺させ候者ハ解死人不_レ及_レ重鞭刑、追放之事

—42—
但其仕方により解死人にも相成へし、輕重時宜御沙汰之事

—43—
百姓町人口論之上相争理不_レ尽之仕方にて不_レ得止争相争を殺候節、相争方之親類并其所之名主庄屋等右被_レ殺

—44—
親類并其所之名主庄屋等右被_レ殺

候者平日無法之者にて申分無之ニ付、
解死人御免之儀願申出、於無紛は
解死人に不及追放

四火附御仕置

—42—
火を附候者男女不限火罪

但乱心酒狂ニ而火を附るといふ共火罪

相成。附火不燃立候共火罪。拾五歳以下

重鞭刑追放被仰渡拾五歳迄親類江

預置、右之内大赦等有之願出候ハ、時宜

寄御沙汰之事

—43—
火附之者同類ニは無之共其者ニ被頼

住所を隠或ハ立退せ候者ハ家賊闕所

之上頼刑追放

五牛馬盗人之御仕置

—44—
牛馬を盗出他領江賣出又は他領之

悪者引入相對致手引候者ハ獄門

—45—
牛馬盗出御領内ニ而賣渡候者斬罪

—46—
盗牛馬と乍存買置候者ハ其料重キハ

—47—
斬罪、輕ハ鞭刑之上追放家賊闕所。

盗牛馬と乍存買置候者ハ親類無紛ニ

於て戸メ之上馬ハ本人江可相返事

—48—
盗牛馬之致手引、又ハ荷担致口入候者ハ斬罪。

但其始末巧ニ致方輕ハ鞭刑追放

—49—
牛馬盗人同類ニは無之共其者ニ被頼

住所を隠し或ハ立退せ候者ハ戸メ過料、

又鞭刑追放

六盜賊之者御仕置

—50—
盗ニ入其家之者ニ被付殺候者ハ引廻之上獄門

—51—
盗ニ入品物不取共其家之者ニ及物にて

手疵を得せ候者ハ獄門

—52—
盗ニ入及物ニは無之共、家内之者江被付

候者ハ斬罪

—53—
土蔵を破、屋障を切盜徒致し候者斬罪

—54—
追剥強盗人を懸候者ハ引廻之上獄門

—55—
田畑作毛盜取候者ハ引廻之上斬罪

但其品輕ハ鞭刑追放、時宜御沙汰之事

—56—
少分たり共御蔵を破又ハ忍入盜徒

殺候者ハ斬罪

—57 盜人之手引致し主人之家賊等盜取せ

候者ハ斬罪

—58 盜賊ト作存致宿、盜物等取扱候者は鞭

刑追放。巧、重ハ斬罪。

—59 手先ニ有之、品を巧候事ヲ禁之、不四

少分之物を盜取候者ハ鞭刑追放。

—60 小盜ニ而後三四度ニ及候者ハ斬罪。

但無犯者一ニ度ニ及之小盜ハ科輕キハ

—61 追放、又ハ鞭刑追放時宜御沙汰之事

小盜等致し輕キ追放ニ而後、御構之地江

立返盜徒致し候者ハ斬罪。

—62 重キ盜賊之者同類ニハ無之候共、其者ニ

被賴住所を隠或は立退せ候者家賊關所追放。

但巧、輕重ニ寄、死罪又ハ鞭刑

—63 盜物買取何品ニ而後致所持罷在候者ハ

取返、被盜候者江相返せ可申、盜物相調

候者輕重ニ依而戸メ又ハ追放

但盜物買取代錢相払盜人遺捨候者、買

取候者之損分ニ致せ、盜人之雜物を以右

買取候代錢償せ申間敷事

—64 盜致へき爲人之屋鋪之内江忍入候

者は、夜中武士屋敷江忍入候得は盜

得寸候共死罪、町方ニ候得は鞭刑。

但町方ニ而後錠を捻切候得は死罪、尤昼

夜ニ差別無之事、凡而少金メハ少計

之品盜取候而も盜之始末ニより死罪。

少々宛之品ニ而後五ヶ所以上盜ニ入

候得は引廻之上死罪。多少之品ニ而後

戸メ之惡敷所江不計盜ニ入候得は死

罪相追候。昼之盜にも錠を捻切入候

得は死罪。

—65 橋其外之金物等盜取候者ハ重藏刑

但輕ハ追放。町宜御沙汰之事

—66 七博奕致し候者御仕置

博奕之窟いたし候者中ニ追放

—67 但家賊關所等輕重時宜御沙汰之事

博奕之上小盜いたし候者鞭刑追放

—68 博奕之上酒狂等ニ而喧嘩口論町内騒せ候

様成不届之者鞭刑追放

—69— 博奕致候者中之追放

但家賊兩所等輕重時宜御沙汰之事

八、謀書謀判致し候御仕置

—70— 謀書を作り親族朋友之向を隔又は

投文等致し異論ニ及せ候様成儀致し候者ハ重追放

但巧ミ輕重ニ寄、時宜御沙汰之事

—71— 在、通役人を真似馬舂等ハ垢往來之

人馬賄等出せ候者斬罪

—72— 價印形古手形等取垢御裁許相願

吟味之上相願候者ハ斬罪

—73— 謀書謀判を以諸渡物等盜候者ハ斬罪

—74— 謀書謀判等を相巧、人を欺き致私曲

候者ハ斬罪

但輕事を謀書等致し候者追放

—75— 似金銀致し候者ハ引廻し磔

—76— 謀判等見遁禮金等を取候者ハ斬罪

九、相對死之者御仕置

—77— 男女申合相果候者子細無之候得は、死骸

取捨。一方存命ニ候得は存命之者ハ解死人

但女相果男存命候得者相對死ニ候得共

女を男安殺其身仕損存命候向相對

死と申儀難立下寺人。又男相果女存命

候得者、相對死と申立候而後相立、三日

晒之上乞食寺下相成候。

—78— 男女共疵而己ニ而存命ニ候ハ、乞食寺江

渡之

—79— 主人と下人申合相果候ハ、死骸取捨。下

人相果主人存命ニ候ハ、不_レ及_レ解死人

乞食寺渡之。主人相果下人存命候得は

下人獄門。

百、喧嘩致し論候者御仕置

—80— 喧嘩ニ而相争打殺又ハ切害致候者

理非に不_レ構解死人、

但相争疵を得候計ニ而不_レ死候ハ、疵を得

候者養生之内、疵付候者村預又ハ八牢。

於平愈者喧嘩之始末ニ倚、時宜御沙汰之事。尤疵治療之儀は疵付候者之願元親類又ハ町内村所迄可申付事

—81
口論計ニ而双方手疵等致無之、町内騒也候類ハ戸メ又ハ町内拂村拂追放

但酒狂之喧嘩右同前

—82
口論酒狂等ニ而人之諸道具損候者過料

但右損失之者江取セ可申、輕キ者にて過料

出兼候ハ、身上限に可申付事

—83
手頁人を乍存不訴出庄屋名主は

戸メ、五人組は過料。

—84
口論之場江出合於致打擲ハ町内村拂

但家賊等は時々御沙汰之事

—85
之房江理不尽之致方ニ而手疵を得セ

候者追放

二、立歸者并御閑所脇道忍出入之者

御仕置

—86
行跡不宜ト申欵又ハ町内村所不和合杯ニ而、

名主庄屋々支配方江相違、町内村所追放

之者、立歸候ハ、鞭刑之上追放

—87
料有之御沙汰之上追放被仰付候者、御構之地江立歸候者は、輕追放之者立返リ惡事

無之候ハ、中之追放、中之追放之者立返リ

惡事無之候ハ、鞭刑追放、其上立返リ

少ニ而該惡事有之候ハ、斬罪

但輕キ追放ニ而該御構之地江立歸惡事

致し候者ハ斬罪。

—88
重追放等被仰付候者御閑所等忍通

又ハ脇道等致し立歸之者ハ獄門。

—89
町在九浦等ニ而屋号致有之相成之身上

柄之者、借込等いたし出奔立歸者ハ

鞭刑追放

但重キハ時宜御沙汰之事

—90
御家中又者等欠落立歸候而其主人方

御裁許申出ニ於テ斬罪

三、盜竊之者御仕置

—91
小屋竈等致泊山御留山ニ而盜竊之者斬罪

—92
馬附ニ致日歸盜竊之者ハ鞭刑追放

一四三 背算荷日歸盜仙之者ハ追放

但過料鞭刑等時宜御沙汰之事

三 盜津出之御仕置

一四四 盜津出之者品物取押過料マハ追放

但鞭刑追放之輕重料に依て、時宜

御沙汰之事。尤過料出兼候者は家賊

關所追放之事

一四五 御停止物隱津出致候者重ハ死刑、輕ハ

鞭刑追放

但右兩案ニ準シ隱荷上御沙汰之事

四 隱田畑之者御仕置

一四六 隱田畑致し候者子細御吟味之上隱田畑ニ

相決候者死罪

但隱田畑之広狭又は事之輕重ニ依て

時宜御沙汰之事

五 公事訴訟強訴御仕置

一四七 一応御裁許相済候儀非分ト存取

繕再御裁許相願、殊非分ニ落着

相沃候ハ、追放

但重キハ家賊取上鞭刑追放

一四八 支配頭之裁許相済、難立儀ヲ強訴

致ニ於てハ輕重ニ依て追放マハ鞭刑

追放

覽

近來料人片付之沙汰及遲々目区々

之儀或有之付爲便理御刑法沙汰

被仰付申出之趣ハ一應被遊

御聽屆候得共、賞罰は御国政之要道ニ

有之料人心意之罰仕業之罰其場

其人ニ善惡深輕重長可有之儀ニ而

別帳之趣而已ハ一定之規矩ニ難被

仰付候沙汰之初右之趣を致勘弁

批判遂穿鑿勸善懲惡ニ相成候様

時宜之心得可有之旨、被

仰出候。右件之趣四奉行江能、可被

申合候、以上

三寛政律との比較

最初に全体として見た安永律（以下安永期の刑罰御定を便宜上このように呼ぶことにする）と寛政律との大きな差異を指摘したい。

先ず第一に寛政律においては、最初に総則的規定が置かれている。例えば刑罰の種類とか或は刑事責任能力に関する老幼廢疾の事とか、共犯に関する一般的な規定とか、五軒組合が連座になるのはどういふ場合とか、婦人犯罪に関する一般的規定とかである。然し安永律では冒頭に「主殺之者御仕置」として10カ条規定し、最後まで個々の犯罪に関する刑罰（各則）を定めているだけで、十分整備されていないことを知るのである。料人を隠した場合についても、主殺の場合（10条）、親殺の場合（18条）、火附の場合（43条）と夫々別箇に規定を設けていて、寛政律の「料有之御詮議之

者を正存隠置或ハ其事を告知ラセ逃候者料人の罪ニ一等を減可申事」（158条）のような一般的などういふ料人を隠した場合にも適用できるものはないのである。

此の事は刑罰の種類についてもいえる。即ち寛政律では戸メから鞭刑・鞭刑追放・徒刑・死刑と段階をはつきり分けて明かであるが、安永律ではかような通則的なものはない。たゞ個々の規定を通して生命刑としては鋸引・火罪・磔・獄門・斬罪・下手人を区別できるに過ぎない。又安永律では徒刑がなく、生命刑に次ぐものは、重鞭刑追放である。此の点、寛政律になつて徒刑が設けられていることが注意されるのである。更に封建社会の刑法であるが故に、封建社会の基本的道徳である主従・親子関係の秩序を破る行爲には最高の刑罰を以てのぞんでいることはいうまでもない事であるが、安永律では、かような重料人（主殺・親殺）が刑の執行前に死亡した場合、「死骸塩漬磔可致事」（91条・117条）と幕府の御定書同様峻厳な態度を示している。然し寛政律には、此の「死

屍刑」が見当らない。それは、寛政律で廃止したというよりは、そのような処分を必要とした事例が存しなかつたことから、整理されたのではないかと考えられる。

寛政律に比較しての特色のオ二は、規定が網羅的でなく、いわは法三章式の簡潔な点である。此の事は寛政律が項目にして97、条数にして仍を数えるのに対し、安永律は前述の如く項目は僅かに15、条数も十分整理されていないものが98を数えるに過ぎないことから伺われるが、更に文言も「時宜御沙汰の事」というのを見受けるのであり、自由裁量の余地を多く残している。かように彈力的な規定は、刑をすべて法定するのよりは、運用に宜しきを得れば、却つて適切な裁判が出来るのであるが、寧ろ專断に流れる危険性を持つだけに、苛酷な裁判が行われたことが想像される。寛政律に比し条文が簡潔で、体系立てられていないことは更に次の例によつても分るのである。

即ち普通殺人についてたゞ「男女不限斬罪」(91条)と規定しているが、寛政律では構成要件を

こまかく分けているのであつて、人殺の「張本人」ハ獄門、加担手伝殺候者ハ斬罪、加担オ＝而手伝不致者ハ徒一年半鞭三十(28条)となつてゐる。又盗袖の場合について安永律では小屋懸して山に泊つて盗袖した場合(91条)と、日漏りて盗袖した場合に分け、後者は更に馬に附けてくるのと(92条)、背負荷で持つて来る(93条)のと區別して刑を定めてゐるのであるが、寛政律では、「袖取之多少を以御蔵之賊物盗取候律」を適用することにしてゐる(100条)。「御蔵之賊物盗取候律」は寛政律の91条にあつて、錢高に依じて鞭六より斬罪まで十三段階の刑罰の区分をしており、安永の大小かな規定に比べて、より体系化されてゐることを知るのである。此は隠田畑の規定についてもいえるので、寛政律では「隠田畑致候者一及歩ケ五及歩込は鞭六、五及歩毎＝一等を加へ可申事。」(106条)としてゐるのに対し、安永律では原則としては死罪とし、但書で「隠田畑之広狭又け争之輕重＝依て時宜御沙汰之事」(96条)と漠然とした規定の仕方をしてゐるのである。強訴

に拘しても寛政律では「顧難相立儀を大勢徒党致し支配預之差回を不相用於強訴ハ其棟梁致候者鞭廿四、加談致候者一等を可減事、其余一通リ之余當ハ吟味之上用捨可致事」(142条)と規定し、首と從を分けていたのであるが、安永律では單に「輕重ニ依て追放又ハ鞭刑追放」(98条)としてゐるに過ぎない。又盜賊の規定を見ても、寛政律では、盜取つた錢高を以て罪の輕重を定めてゐるので、14段階に分つて輕いのは鞭三より、重いのは斬罪に及んでゐる(86条)。然るに安永律では、かように金高によつて分けず、小盜の場合(59条)、累犯加重の場合(60条)、追放になつてゐながら御構の地へ立歸り更に盜んだ場合(61条)等によつて夫々別箇に規定してゐるのである。従つて此等の条文は寛政律にはないのである。

第三に寛政律に比し安永律は一般に刑が重く規定されてゐる。例えは隠津出について見ると寛政律では、原則として鞭十五であるが(143条)、安永律では、過料又は追放(94条)であり、特に御停止物の隠津出は重いのには死刑、輕くて鞭刑追放

(95条)となつてゐる。更に先に触れた隠田畑にしても、寛政律では一反歩より五反歩までは鞭六で、五反歩毎に一等を加えてゐるが、安永律では原則として死罪であり、たゞ事の輕重により適宜処置できるとされてゐるに過ぎないのである。安永より更に五十年ほど早い享保八年(一七二三年)には弘前藩では、隠田した左屋を引廻し磔という極刑に処した例があるほどであるから、それに比べるに寛政律は非常に刑を輕くしてゐることが分る。又安永律では元仕えたことのある主人を下人が殺した場合、当主人を殺した場合と同様な扱い即ち磔者、鋸引となつてゐるのであるが(3条)寛政律では區別して單に磔としてゐる(43条)。似て役人が往來の人馬賄等を差出させた場合について見ても、安永律では斬罪(71条)であるが、寛政律では鞭三十(118条)に過ぎない。文書偽造の上、諸渡物等盜取つた場合も安永律は斬罪(73条)とし、寛政律は竊盜に準じ金額に応じて輕重を決めることにしてゐる(115条)。

此のように時代が下ると刑が輕くなつてゐる例

は、幕府法にも思われるのであつて、縁坐制が緩和されたり、女性に対する刑も鼓に代り過怠牢に減することとしてゐる例がある。^註

次には個々の条文でやゝ注意すべきものを取上げて安永律の特色を補足することにする。

安永律は冒頭に「主殺之者御仕置」という見出で10ヵ条規定され、次には「親殺之者御仕置」として8ヵ条記されており、此は封建社会における身分的秩序を維持する爲に主殺・親殺を共に逆罪として重視したことをうかがうことが出来る。それ故に男女に限らず肆者^{しや}誘引という極刑に処することにしてゐるのである(1条・11条)。「マ乱心」・「酒狂」による殺害であつても刑事責任を免除せず、「引廻し上磔」としてゐる(2条・12条)。このように乱心・酒狂による場合でもなお刑を免除しないのは主人や親を傷害した場合と更に普通殺人・放火があげられる(5・13・21・42条)。これらの場合は刑の減軽をしてゐないのであつて、普通人の犯した場合と同様に夫々磔・斬罪・火罪となつてゐるのである。乱心・酒狂の場

合の事は寛政律には別段の規定を設けてゐない。

安永律の6条では怪我即ち過失で主人を殺した場合のことを規定してゐるが、過失でも斬罪となつてゐる。但し被害者の親又は兄があつて助命を頼いだ節は、情狀によつて重鞭刑追放ということにして軽減出来る余地を残してゐるのである。

次に主殺・親殺については縁坐制の規定があり主殺・親殺の者の子供男子拾五より以上は重鞭刑追放、拾五以下は拾五になるまで身寄りの者に預けられた上で重鞭刑追放を命じられるのである(8条・16条)。寛政律にも親殺について縁坐制があり「親殺之者妻子不殘遠追放、家屋敷家賊闕所」(35条)とあるのであるが、主殺についての縁坐制は見当らない。

主人や親以外でも目上の者を殺した場合加重されるのであり、22条から25条まで規定があつて肆者^{しや}磔或は引廻し上磔となつてゐる。然し身分の下の方を殺した場合でも、理由もなく我儘に妾や女房を殺した者は普通殺人同様斬罪に処せられることになつてゐるのである(26・27条)。たゞし、子や

下人を殺した場合「時宜之御沙汰」があること
になつていて、弾力性を持たせているわけである
(29・38条)。寛政律では子や孫を殺した場合「解
死人」不及、徒一年半鞭三十」となつてゐる(40条)。

寛政律にはなく安永律の中で注意を惹く条文の
一に重料の者が逃走した場合の規定(31条)があ
る。即ち主殺とか親殺、其他重料の者が逃亡して
官憲の目をくらました場合、今まで逃亡犯人を預
つてゐた者や両親を入牢させてゐるのであつて、
連坐制の一例としてあげられると思う。

身内の者の信を破るような仕方での殺人も本嚴
罰に処することにしていて獄門である(36・37条)。

百姓、町人等が口論の上で、相手に理不尽の行
爲があり、止むを得ず相手を殺したような場合
は、解死人に及ばず、追放刑で足りるとしていて
正当防衛的な考え方が見られるのである。但し相
手方の親類・名主等より殺された者が平生無法者
で申訳なしとして下手人免除を願出ることが必要
なのである(41条)。

火附については男女に限りず火罪としていて(

42条)同害報復を感じさせるものがあり、寛政律
も同様になつてゐる。寛政律の方は、文化元年(一
八〇四)につけ加えられたものであるが、「盗
のため火を附候者火刑 但燭立不申候得ハ斬罪」
(本誌15・16合併号、四五頁)となつていて未遂
の場合を區別して斬罪としてゐるが、安永律では
「附火不燃立候共火罪」とあり、未遂も既遂と同
様に扱つてゐるのである。

牛馬に対する犯罪は、一般の盜賊と區別して重
視したやうで、寛政律では僅かに一ヶ条(49条)
を設けてゐるに過ぎないのに対し、安永律では六
ヶ条を数えてゐる。牛馬を盗み出し他領へ売出し
た場合(44条)、領内で売渡した場合(45条)、
盗牛馬と知りながら買った場合(46・47条)、共
犯の場合(48条・49条)と、夫々場合を分けて、
入念に規定してゐる。此は牛馬を農料に必要な財
産として、又武器の一種として重要視してゐたこ
とをうかがい得るのである。それ故に牛馬を直接
盗まなくても、盗みの手引、荷担口入をしただけ
で斬罪である(48条)。但し此の共犯の場合には情

状の軽いときは鞭刑追放ですませることにしているのであるが。

盗賊に關する規定は16ヶ条を数える。先ず強盜殺人の場合を規定し引廻の上獄門としている(50条)。その他強盜傷人(51・52条)、土蔵破り(53条)御蔵破り(56条)、收獲物の盜取(55条)、共犯(57・58条)、小盜(59条)、累犯(60条)等、割合こそかく規定があるのは、天災などによる不作が続いたりした結果、生活困窮し、盜犯の多かつたことを想像させるものがある。

御蔵を破つた場合は少分であつても斬罪に処せられるようになってゐる(56条)が、寛政律では此に該当する同様なものは見当らない。たゞ城中へ忍び込んで盜を働いた場合は獄門とされている(61条)。

博奕に關しては4ヶ条の規定を見るが、寛政律では一カ条(44条)を置いてゐるだけである。此は安永律の66条と69条を寛政律の一カ条にまとめた他に、安永律の67条(博奕の上小盜)68条(博奕の上喧嘩口論)は、寛政律では竊盜と喧嘩打撃

の項に包含せしめて条文を整理してゐるからである。安永律では博奕をした者並に宿を提供した者共に中の追放としてゐる(66・69条)が、寛政律では輕三と大分輕くなつてゐる。

通貨の信用を確保する見地から似せ金づくりには嚴罰を以て臨んでおり、引廻し確としてゐる(75条)が寛政律も同様に確(引廻しはない)である(74条)。相對死に關するものは、るゝ条であるが、寛政律と全く同じといつてよい。

又支配者たる武士が町人階級より特に厚く遇されてゐることを示すものに、盜賊が人の屋敷内へ忍び入つた場合、夜中に武士屋敷へ忍び入つた場合は盜み得ず未遂に終つても死罪であり、町方へ入つた場合は鞭刑として區別してゐることがある(64条)。

以上ごく大ざつぱに安永律と寛政律との比較を試み、更に安永律の個々の条文で疑のつく處を除絡もなく取上げて少しでも安永律の特色を明らかにしようとしたのであるが、力なく寸分尽くせないのでことを遺憾としなければならぬ。

四 結 び

終りに幕府法との関係について考えてみたい。
安永律は項目にして15であるから、寛政律の列に比較して又た々けで、かなり粗略なものであることが分るが、それ故に幕府法を系統的に学んで取入れた痕跡は殆ど見られないと言つてよいと思う。たゞ相對死に關するもののように個々の規定の中には幕府法と類似のものを見出すことは出来る。弘前藩では、寛政律を経て文化年時の改定増補の刑法牒に至つて幕府法の考しい影響を見るようになるのである。その点の追求は今後に待ちたいと考ふる。

又政治的社会的背景を十分につかんだ上で規定の意味を解釈しなければならぬところであるが、未だ検討がいきとどいていないので、甚だ無味乾燥な法文の比較に終つたことをお詫びしたい。一応史料の紹介の意味で筆をとつた次第である。

(一九五九・二・三三)

註

(一) 寛政九年——津輕藩旧記伝類・卷之五・癸丑牧

野三次郎恒貞の項に文化七年(一八一〇)に至つて整備制定されたと見えるが、此は寛政九年に制定された「寛政律」を更に改訂増補したいわば「文化律」と稱すべきものではないかと考へられる。なほかといへば、文政史料館に所蔵されている津輕家文書の中の「津輕制定略」(押)——刑法の部——の中に次の文章が見えるのである。即ち「刑法の儀中古以来明律清律等を参酌し、近令仕末候迄、二十三代寧親代寛政九年初一定の律を制し、之を寛政律と三。

右は藩士伴也助専ら担任する迄なり。其代長谷川献吉・黒滝藤太等江戸へ出幕府の法律家に於いて詮議の上増補する迄有之爾来尾藩に至る迄之に依る」とある。此の文章に見えるように幕府の法律家について相談した上、増補したものが出来上つたのが、文化七年ではないかと考へられるのである。

(二) 児玉幸多著「近世農民生活史」一七頁。

(三) 石井良助著「日本法制史概説」四八九頁。